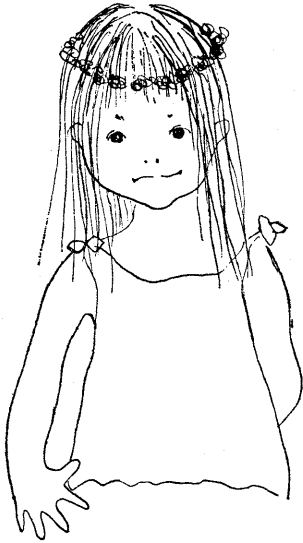


「しつけ」の理論について

——高橋恵子博士の『自立への旅だち』に関連して——



波多野 完治

(1)

高橋恵子博士の「自立への旅だち」は、「ゼロオレ二才児を育てる」という副題をもっている。このことからもわかるとおり、これは、「育児」のハウツーにも役立つように企画され、執筆されたものである。われわれは、この本のいたるところに、「新しい育児」についてのヒントや暗示をよみとることができる。

しかし、同時に、この本は、育児、とくに「しつけ」

についての原理的な主張をふまえて書かれているので、「しつけ」の理論について、根本的な反省をするための、よい機会をも提供している。ここで問題にしたいのは、そのしつけ原理についての面である。

しつけ、というと、従来は、子どもを「社会化」させるための方式として、漠然とうけとられ、したがって、しつけの本といえば、世の中で「よい子」とされている子どもに向かって、赤ん坊をどう習慣づけるか、ということに関心のむいたものが多かった。「よい子」というのは、社会で規範とされていることに無批判に従い、あまり社会から逸脱した行為をしない子ども、とくに、具体的には、教師と両親のいうことは無条件にまもるような子どもである。つまり、デュルケムのな意味での社会威圧に服するのが、よい子の第一の資格であった、といえるだろう。

ところが著者によると、こういうよい子の社会は、現代ではむしろその存在があやういとされており、二十一世紀という、まったく未知の世界にのり出していく人間

としては、不適応をおかすおそれさえある。現在以後、しつけは、もっと子どもの多様な能力をのばす方向に行われなくてはならぬ。

そのために大切になるのが、つぎの二つの原則である。

第一は「愛着と自立」である。愛着については、ハーローのサルの実験が有名で、一時ブームの観を呈したが、著者は、ハーローの実験は、サルについて行われたものとして、どちらかというところをしりぞける。ハーローのサルは、サルとしても異常な環境におかれたものである。ふつうのサルは集団で生活しているのに、ハーローのサルは、母子のみという孤立した状況で飼育されている。授乳の方法も、実験のためとはいえ、異常である。こういう異常な条件の下でおこなわれた実験結果を、それがいかに説得的であろうとも、そのまま人間のふつうの生活に適用してよい筈がない。つまり、ハーローの実験から人間の赤ん坊まで、われわれは、たくさんのミッシング・リンクをもつのである。

愛着が人格発展の原理の一つだということをかりに承認するとして、ハーローのサルには自立の要素がかけられている。これに反して、人間においては、自立の要求はきわめてつよく、「愛着のなかに自立がある」といってもよいくらいである。これは人間には本来的にコミュニケーションの要求があることから来ているらしい、と著者は考えている。この基本構造は、フランスの心理学者ワロンのはじめて提出したものだが、著者もほぼ同じ仮説を提示している。

第二の原理は、人間の人格は無限の可能性をもったもので、「三才までにきまる」とか、「三才ではおそすぎ」というのは、科学の仮面をかぶった迷信だ、というものである。日本ではこの主張は、「三つ子のたましい百まで」というような、伝統的児童観と融合した形で出て来たために、大きな説得力をもった。そうして一種の宿命観のようなものになり、知識層からブルーカラーにいたるまで、全てがそれに染まる、というような観を呈した。著者はこれに反撥する。そうして、人格の基礎の

かなりな部分は、○才から二才までにきまるにせよ、それが宿命となって人間の一生を左右するようなことは絶対にない、と力づよく、述べるのである。人間は、一生、可変的なものであり、方法がよく、努力すれば、状況に応じた人格をみずからつくりあげることができ。この点では、著者は、ワロン風のフランス児童心理学の影響とともに、アメリカ風の楽観主義的育児論の影響をつよくうけていて、人間の教育による変化の面をみおとしていないので、読後に壮快な感をあたえる。

このように、二つの原理によってしつけの目的と方法を説くので、著者の主張は、一種の自然主義の観を呈する。第二の原理は、人間の人格は、赤ん坊のときにきまるのでなく、その後、幼児、児童、青年、と、どんどん変っていき、また変わりうるものであると主張するので、ある程度、条件反射学的児童観に近い。しかし、条件反射学が食物および食物にむすびついた「条件刺戟」を極端に重視するのに対し、著者は、愛着および愛着における自立を原理とする第二の原則を立てるので、条件

反射主義からまぬかれている。しかし、しつけを「社会化」のためとみないで、人格の多様化、多面化のためと考える点で、社会適応主義からまぬかれている。

このように考えると、著者の考える「しつけ」理論の新しさが理解できよう。著者はこのような自らおこなった二十年にわたる愛着の科学的研究の成果として、旧来の社会に適応するしつけではなく、未来の、二十一世紀のためのしつけの展望を開いてみせてくれたのである。

こういう立場から、著者は、現在ひろく行われているしつけの理論および実践にふかい憂慮を表明している。育児は著者のような原理にもとづけば、楽しく、のんびりとやれる筈のものである。早く早く子どもをせきたてようとするから「大変な」ものになり、つらいものになる。現代の育児が母親の苦勞のタネになっているとすれば、それはいまの育児原理がまちがっているからではないか、と著者はいうのである。

(2)

わたしは著者の主張する育児理論に大部分賛成である。実は、わたしの女房が高橋博士のいう育児原理の萌芽をつくったのではないか、という自負さえある。だから本書の内容に異議をさしはさむべき理由は毛頭ない。ただ、問題を呈示するような仕方をまったく別の角度からながめてみよう。

著者はいう。

「三つ子の魂百まで」ということわざは、日本人の中には特に根強いものですが、すでに見てきたように生涯にわたる長い時間の中で人間の变化の可能性の大きさの方に、私たちはむしろ注目すべきです。実際、その証拠がたくさんあるわけですし、子どもが自分で選び、自分で学び、軌道を修正するという自己学習能力は非常に高く、育児において取り返しのつかないような誤りというもの、は、まずないと考えた方がよいと思います。

「母と子」の絆については、最近、胎児期までさかのぼって、あるいは生まれてすぐに母と子の絆をつくる敏感期があるなどといわれていますが、そういう科学的根拠はたしかなものではありません。それほど反証がで

つつあります。すでに見てきたように、人間の赤ちゃんが特に人間に魅かれるようになるには、生後三か月ほどかかります。それからさらに人間の中でもとりわけこの人が重要だと選ぶようになるには、これを母と子の絆というのですが、半年から一年もかかるのです。

つまり「絆」は、いろいろな経験を積み重ねてようやくできるものであって、生んだからとか、母胎の中に入ったからとか、産後すぐに子どもに触ったからというようなことでは説明できません。第一、母と子の「絆」が生後数日、あるいは数週の間にはできないなどということは、乳児の能力からいっても不可能です。「絆」は決して神秘的なものではありません。半年から一年の間にかけて、子どもが検討し、自分はこの人が気に入ったと選ぶものです。また初めの愛着の相手が母親でないこともありますし、それが特に問題だというわけではないこともすでに見てきたとおりです。

また次のようにもいっている。

ひと昔もふた昔も前ならば、迷信だと笑いとばしていたものでも、最近では胎児の動く姿をテレビで見せて、胎児がそんなことをすると泣いていますよ、あるいは苦

しんでいますよ、などと解釈してみたり、科学的な実験の結果だといったりして、科学の衣を着せて強調したりされます。また、隔離したサルの実験結果を見せて、人間もこうなるのだとサルから人に一気に思考を飛ばせてしまいます。このように、あたかも確実な科学的な根があるようなかたちで、テレビや活字でせまってくる情報に、きちんと対処できるようにしなければなりません。

迷信ではないという顔をしている迷信や偏見ほど、恐ろしいものではありません。こういうものをはねのける強さを、今、親や保育者は必要とされているのです。

これらの引用をみても、著者は、現代の俗見にはげしく反対しているのがわかり、その真率な態度に頭が下がるが、同時に著者は現代の俗見に「正面から反対する態度」で物をいっている。

日本の育児には、伝統があって、「血のつながり」に不思議な力をみとめるのである。そうして、これに反対するものは、必ず敗れるか、または、大へんな長い苦勞の後にはじめて成功するかのいずれかである。

わたしは、昭和のはじめ以来、教育の近代化を志し、

五十年ほど苦しい闘いを闘ってきた。その結果、日本の教育は近代化されたか。

少しは近代化された、といえるであろう。しかし、わたしたちの努力の量に比べれば、その成功の度合はすくない。つまり、わたしたちは、「生徒と教師との心のきずな」という、日本教育の伝統的気風を無視する傾向があり、それがために成功しなかったのだ、と八十才になってわたしは悟ったのである。

いま、高橋博士のことを聞いてみると、
「ああ、この人もやっばり」

という思いを止めることができない。つまり、説得のための基本的な姿勢を欠いているのであろう。

日本の育児の伝統は長い。そしてそれは血の信仰を基調にしている。この場合には、血の信仰を破壊しない形での「新しい育児」の導入を考えなくては、新しい育児原理を日本の育児に組み入れることはむずかしい。これが「説得の心理」の訓えるところである。実をいうと、「三才までにきまる」とか「三才ではおすすぎる」とか

いっている諸君も、日本人のこの心理にうまく乗ったからこそ、あのような勢力になることができたのである。

ケーガンのいうような「人間の発達では、連続性というものが、きわめて小さいことです」（本書八ページ）という立言が、たやすくまかり通る世界に、日本心性はいないのだ。これは悲しいことだが、事実なのである。いつも昔の原理にたしかえることによって、日本では新しいものが正当化される。教育においては特にそうである。これは、わたしが教育革新運動を六十年つづけて、骨身にしみてわかったことである。

高橋博士の「自立への旅立ち」は、本当によい本である。しかし、この本によって、正しい育児にきりかえてくれる人はすくないのではないか、とわたしはおそれる。わたしは高橋博士が新しい育児原理のために、その理論をでなく、その普及の方法を根本から考えなおすことを心からねがわずにはいられない。その原理が革命的であればあるだけ、その普及は、日本では「復古」の形をとらざるを得ないのである。